

■ 続・らくだ日記（六十五） 佐怒賀正美 ■

熊野の夏大齋原は宇宙卵

小林貴子

（句集『黄金分割』（二〇一九年・朔出版刊））

本句集は二〇〇八年から二〇一四年までの七年間の作品で編まれている第四句集である。とにかく存分に楽しませてくれる。何よりも次の一句には、作者の豪胆さと自由さと好奇心が満ち満ちている。

チャーゴグガゴグマンチャウグガゴグチャウバナガンガマウグ湖涼し

「アメリカマサチューセッツ州の湖」と前書があるが、原住民に伝わる呪文のような、外国人には謎だらけの名称だが、なんだか魚群やら水鳥やら精霊やらごちゃごちゃうじやうじやいるようで愉快だ。この長さ暗唱できるのだろうか。

ちなみに、ひと昔前、世界で一番長い駅名を暗記していて、英和大辞典に載っているスペルと発音が数か所違おうと指摘してこられた方がいた。イギリスの駅名だそうだ。それは、

Lanfairpwllgwyngyllgogerychwyrndrobwlilanantysiliogogogonであった。五十八文字。これも寿限無のようだ。

閑話休題。冒頭に引いた句は、広やかさの限界を呼び込ん

だような大らかで遊び心に富んだ句だ。熊野古道を歩いていくと、熊野川の流れる広やかな平地に出る。そこが大齋原おおゆのはらで、大きな鳥居の後ろの小さな森の中に熊野本宮大社がある。熊野の山々に囲まれてぼっかり空いたような神域。なるほどここならば「宇宙」から産み落とされた卵と言えるかもしれない。卵が孵って新しい宇宙が生まれるのは何十億年後か。膨大な未来の時間がここには秘められているのだ。夏の熊野の照りつけるような光を、孵る日のためのエネルギーに蓄えながら。大齋原は途轍もない幻想的な未知の宇宙を抱え込んでいるのだろう。

その他にも、〈諏訪の湖大軽率鳥を氷上に〉〈あらたまの綾あや蝶舞はびるふ宮古島〉〈大阪の夜のこてこての氷菓かな〉〈林中に獣の尸霧氷咲く〉〈粥罷かばねなり僧の弾指の涼しさも〉〈首里城を渡る夏ぐれ龍かとも（注…夏ぐれⅡ夕立）〉〈巢立ち時磯鴨のぼやぼや毛〉など、言葉への好奇心が作家として純粹に働いている。だから、内容に加えて言葉探しの楽しさに共感できる。また、〈月祀る篝火の炎に根のあらず〉〈仲良くはないが集まり冬眠す〉にも強く共感したことを付け加えたい。

■ 続・らくだ日記（六十四） 佐怒賀正美 ■

てんでんに遊ぶ子てんでんに嚏くしゃみ 佐怒賀直美

『佐怒賀直美集』自註現代俳句シリーズ12期⑭・

令和元年・公益社団法人俳人協会刊

俳人協会の自註シリーズはすでに十二期に入っている。一つのシリーズの出版を長年継続することは大変なことである。この自註句集に収められたのは、昭和五十七年の出発点から平成十六年までの三百句。独立した一般の句集とは性格付けの異なる点が興味深い。この自註句集では、家族や恩師への思いが濃厚に心地よく流れている。〈清水掬むとき黒髪くろかみの風となる〉は妻の由美子に捧げる愛の歌。いま再読しても瑞々しい。いわば、俳句に絡んだ作者の自伝とでも言うべきものになっている。

いままでの句集の際に見逃していて、今回新たに気づいた句もある。たとえば、〈曲がり端はなで虫は胴膨らます〉（かまどうまの尻押せば跳ぶ若狭晴）〈風止んで蝌蚪密集の安寿塚〉（門柱に白鷺かじかのゐる三日かな）〈膝頭に川受け止めてかじか鰈獲る〉など動物を読み込んだ句である。

恩師の松本旭にも、その研究対象だった村上鬼城にも、すぐれた動物の句が多いが、直美もどこかでその氣息を引き継いでいるのかもしれない。特に、「でで虫」の句は具体的によく観察した作で、これも代表句として堂々とした写生句である。自宅には、（餌をやっているので野良猫ではない）三毛猫や、（先住者として居付いていた）蛇や、セキセイインコなど、動物との交流もけっこう密なのである。

冒頭の句は、家族詠の一つだが、「決して中の悪いわけではないのだが、時にはそれぞれ何かに熱中していることがある。子どもたちの成長を感じる一瞬でもあった。」との自註にでも出てきそうな情景である。幼い兄弟でもすこし離れてそれぞれ一人遊びをすることもあるが、その視点から詠まれた俳句はあまり見たことがない。普段仲がいいから、風邪も同じ時期に引き、次々に嚏をする。表現的には、くだけた「てんでんに」の口語の繰り返しが一句のリズムを軽快にしている上、句末の「嚏」の据え方も心地よい意外感があつて効果的である。五・四・五・三の変則的リズムながらも、親しさのある口誦性にすぐれた一句となっている。

夕焼けの腸豹^{わた}に詰め剝製師 高岡 修

(二〇一九年刊・句集『剝製師』・深夜叢書社)

鹿兒島の詩人・俳人である高岡修さんより第七句集『剝製師』をいただいた。頁を繰るたびに現代詩的な手法の暗黒句が押し寄せ惹き込まれた。作者の闇は、宇宙に抱かれた深い鎮魂の闇でもあり悲しく優しい。烈しい創作意欲と強靱な想像力から前衛的な詩的世界が次々に更新され、心地よい読了感を得た。帯文に「世界に（あるいは全宇宙に）無数にある痛点を、言葉の針によって刺し貫く、その痛点の輝きが、現在の俳句の喩空間である」（高岡修）とも記す。

全体は六つの章に分かれているが、その章題を見るだけでも本句集の色合いは見えてくる。順に、「現象の地平」「水棺」「死のゲノム」「流刑」「海鳴りの凶鑑」「剝製師」。

特に印象深かったのは、三・一や原爆への思いの句も含めて、〈蝶の舌水の殺意に触れひるむ〉〈それぞれの眼差し持ちて流される〉〈死地へ行く象の背後のような春〉〈のたうちて

誰（た）が打擲す天の川〉〈暗黒の蝶の欠伸よ無のゆらぎ〉〈か
いやぐら子の骨ひろうこの箸も〉〈にれかむは牛のかたちの蜃
気楼〉〈キノコ雲の菌糸びつしり国家論〉〈顔を脱ぎやさしい
闇となつている〉〈転生の子のまだ未生なる花野〉〈柩閉ず碧
い氷河を孵すため〉など。

さて、冒頭掲出の句だが、「剝製師」は実際に存在する。人間以外の、死んだ動物に新たな息を吹き込む貴重な職でもある。芸術的でもあり、科学標本としての価値もある。

しかしながら、この句から私が受けた第一印象は、シュールレアリスム的な剝製制作の情景だ。動物は「豹」。「豹は死して皮を留め、人は死して名を留む」。その豹に、一旦抉り出した内臓に代わって、あの焼け爛れたような夕焼けの腸を詰め込むというのだ。遠い時代の世界のどこやらで秘儀や祝祭のようになされていた幻の風景が現出したかのような錯覚を覚えた。実際としてはあり得ないが、詩の一行としては、夕焼けというより深い宇宙の命と繋がった豹の生命感がリアルに蘇る。一見超現実的に映るこの「剝製師」こそ、鎮魂や祈りのもとに、詩をもって死後の永遠の蘇生を図る詩人の自画像とも思える。想像力による世界の豊かさをこの句集に見た。

■ 続・らくだ日記 (六十二) 佐怒賀正美 ■

素裸のみみずよ地割れの太鼓鳴る 石牟礼道子

『石牟礼道子全句集 泣きなが原』藤原書店

今年の現代俳句協会の評論賞は武良竜彦さん(二)に決まった。対象評論は、「桜しやんげいの花の美いづくしさよなあ ―石牟礼道子俳句が問いかけるもの」である。石牟礼道子は、もちろん水俣病を主題にした『苦海浄土』で知られる作家である。武良さんの評論は、石牟礼文学を包括する視点から、その俳句の位置づけを試みた力論であった。俳句総合誌編集者向けの現代俳句協会の「定例会見」でも、『苦海浄土』をはじめとする著作が文学であることを強調され、ガルシア・マルケスを引き合いに出されたのも印象深かった。

上掲の句に出合って戦慄が走った。原初的で鮮烈なイメージながら、文字に意味を追い始めると、人間の悲劇が暗然として見えてくる。「素裸のみみずよ」とはなんと瑞々しい恥辱と無力感を伝える内観的表現であろうか。人為的な災害である水俣病に虫けらのように翻弄された人間を「みみず」に

見立てたのだろうか、一句独立の読みからは「水俣病」の背景までは確定できない。しかしながら、勘のいい読者ならばこの句に大きな暗喩性を読み取るのは難しいことではなからう。「太鼓」というのは伝達や祭祀に用いる原始的な楽器でもあるが、この句では悪魔の所業を思わせる凄絶な振動と音量をもって、「地割れ」という奈落の底を見せながら、「素裸のみみず」に急迫し、読者の胸中をも深く揺さぶる。「地割れの太鼓」はもはや誰にも制御できないのか。水俣病や原発の災害も含めて、世界の崩壊は回避できるのか。天災を超えるほどの人災の悲劇の中で「みみず」の人間の尊厳はいかに問われるのか。本句に見える生命の危機感と事態の切迫感、暗喩性の中にも強い内実を伝えてくる。

句集には、黒田杏子さんが引かれた〈祈るべき天とおもえど天の病む〉〈さくらさくらわが不知火はひかり風〉〈毒死列島身悶えしつつ野辺の花〉以外にも、〈けし一輪かざして連れゆく白い象を〉〈ふるさとは桃の蕾ぞ出魂儀〉〈天上に棲み替えて蛙らの声やよし〉〈雲の上に綾蝶舞い雷鳴す〉など印象深い句が散見される。是非ご一読を。

座持よき流灯あれはきつと母

水内慶太

（平成二六年作・句集『水の器』・本阿弥書店刊）

水内慶太さんの第二句集『水の器』をいただいて早速拝読した。季節ごとに「銀漢亭」での超結社句会に同席させていただいているが、お誘いくださったのも水内さんだったかと思う。若き日に上田五千石に師事し、飾らぬ正直な師に接した思い出をしばしば聞かせていただきながら、情（こころ）のつながりの濃さが美酒の肴にもなっている。その後、中原道夫さんの「銀化」を経て、『月の匣』を平成二二年に創刊。今日に至っている。水内さんには、もう一人、村上護さんという師があった。私も何度か一緒に過ごす機会をいただいたが、はにかみがちに若い人にも分け隔てなく接してくださる村上さんの温かさは、いつまでも心に残った。今回の句集で水内さんは、二人の師へ、〈畦秋忌を思へば木の実あたたかし〉〈まもさんと同行ににん水の夏〉を献呈されている。

さて、師の五千石は「眼前直覚」を説かれたが、作者の句

風の基調も瞬間的な感動の把握である。情を引き出す景の把握と言ってもよい。〈しほさゝみの間遠を若狭しぐれかな〉〈雪溪を踏みはつこひの次の恋〉〈青簾ぬけきてにほふ風の傷〉〈手毬つく手の作りだす闇のあり〉〈雪の降る街に売られてくる魚族〉〈いかなごや昼より日暮明るくて〉など佳品に恵まれている。その他に、〈虹生えて来るまで穴に水遣りぬ〉〈死ぬといふ一遊のこし大朝寝〉〈旅にゐて書淫をとほすきりぎりす〉などの心の遊びも愉快である。

最後に、上掲の句に触れよう。まことに人間味に溢れた母恋の句となっている。「座持よき」には親しさと軽いユーモアを感じる。母がいるだけで客やら友人やら家族やら皆がくつろいだ時間を共有できたのだろう。明朗で機転が利きほどよくお節介な情を持つ、皆から好かれ親しまれる庶民的性格の母。そんなことを勝手にイメージさせていただいた。流灯の中に、まわりを囲まれながらゆっくり流れているものがある。それは母の流灯にちがいない。「あれはきつと母」という口語表現に心の余裕も遊びも普段のように感じられて、気取らない親しみのある句になっている。

先陣や人馬闇の藪の中 中村寒郎

人馬瘦体藪の奥なる呻きごえ 〃

今年一月に他界された寒郎さんの絶句。意識も朦朧とした中で書かれたものであろう。読み解くになかなか困難な漢字もあるが、おおよその見当をもって結論としたい。

寒郎さんは、仏文学者としてヴェルレーヌやランボーはじめ象徴主義の詩人たち、サン・テグジュペリなど、現代文学を研究されてきたが、画家ゴーギャンの世界にも惹かれ、マルティニック島まで単身渡航も果たされた。一方、社会参加(アンガージュマン)の態度も取り続けられた。「秋」に寄稿

された文章にも、沖繩戦や沖繩の基地問題、広島・長崎への原爆、水俣病、原発問題、憲法九条等々、広い現実的な視野がうかがわれ、傲慢な権力への批判と庶民生活への共感を基調に、社会活動への参加も永続された。昨年、弾圧された新興俳句俳人たちの「不忘の碑」と「檻の俳句館」をマブソン青眼さんが作られたことをとても喜んでおられた。マブソンさんがなされた金子兜太の戦争体験談のフランス語訳にも関

心を持ち、「秋」にも長文の書評を病中ながら執筆された。これが最後の執筆原稿になったかと思う。

さて、上掲句では、先の戦争の、人だけでなく、兵と運命を共にした馬へも鎮魂の思いはとどく。一句目は、藪の中で先陣としての出撃を待っている人馬を、深い大陸の闇が包み込む風景であろうか。二句目は、疲労や病気、飢餓などで痩せ細った人馬に思いを馳せる。「藪の中」に身を隠しているが、その奥からは「呻きごえ」が聞こえてくる。戦争の悲運に翻弄された人と馬の凄惨な最期を思い描く。自らの最期になぜこのような追体験的な幻想に見舞われたのかは謎だが、読み方によっては、二句とも、戦地の人馬に闘病中の自らの最期の心境を重ねたとも思える。

寒郎さん一家とは、義父・橋本喜典とその家族は若い時からの交流があった。私も学生の頃に面識を得て以来、四十年を超えるお付き合いであったが、のちに「秋」で俳句の友人になるとは夢にも思っていなかった。一足先に旅立たれた奥様の二三恵さん(「からまつ」副主宰)とも俳句でつながらせていただいた。この間、お二人の豊かで深い人間精神に多くを学んだ。ご冥福を心から祈るばかりである。

聖鐘や干潟の端に人透けて 中村 遥

（本阿弥書店第三十三回俳壇賞受賞作品「白」三十句より）

先日俳壇賞の授賞式が二月十五日アルカディア市ヶ谷で行われた。私も選考委員の一人として出席した。選考委員は星野高士、鳥居真理子、そして今回が最後となる富士眞奈美さんの四名。次回からは富士さんに代わって井上弘美さんが加わる。

昨年はちょうどこの時期、オリエンタルクルーズの俳句教室講師としてインドネシアやフィリピンなど南海にいたので欠席したが、俳壇、歌壇と両部門の入賞者や選考委員代表の深いお話しを聞くことができて有意義な授賞式であった。

「秋」からは昨年度は満田三椒、今年度は津田道代が最終選考に残ったが、残念ながら入賞には至らなかった。

中村さんは今回が十回目で、これを最後と思つての応募だったそう。似たような話を最近聞いたと思つたら、現代俳句協会評論賞の昨年度の受賞者である後藤章さんが、やはり十回目の評論の応募だった。こちらも評論を毎年書いてこら

れたとは、この粘りもこれまた凄い。

さて、今回の受賞作だが、私と鳥居さん、星野さんの三名の推薦を得ての堂々たる入賞であった。冒頭から、〈鏡古りたり鼻の声容れて〉〈木守を落とす程なる波の音〉〈返り咲くものへ潮気をこぼす鳥〉など人間と自然と天体が混然一体になったような深い詩的宇宙が展開されて、一気に引き込まれた。他にも〈出開帳もな鳥ほどの息をして〉〈蓮の花人の句ひに崩れけり〉など感覚の繊細な句が際立った。

私自身は、特に冒頭の句に特異な感覚を引き出された。もちろん、干潟とは引き潮と共に現れる海岸の浅瀬である。干潟というのはまことに楽しい。海水に隠れていた海の生物があちらこちらに姿を現す。生物にとつては、本来の生息地であるものと逃げ遅れたものとあるに違いない。この句は、その干潟に聖なる鐘の音が響きわたっている。一瞬、西欧の風景かと思つたが、もちろん日本でもよい。干潟の端っこに人影が認められたと思つた瞬間、その影は透き通つたというのだ。鐘の音が支配する光の世界のなかに現出した海境（うなさか）を思つた。なかなかナイーブな世界でもある。私とはぼ同世代、大いに期待したい作家である。

びたぴたと子が来てごまめ鷲掴み 堀本裕樹

（『短歌と俳句の五十番勝負』二〇一八年・新潮社刊）

年末に入り、机上に積んであった本やアマゾンで取り寄せた本など、アトランダムに読み始めた。この本は、五十人からそれぞれ出されたお題について、実力歌人の穂村弘と新鋭俳人の堀本裕樹が短歌と俳句を詠み比べ、ミニエッセーを記すもの。お題の捌き方を通じて短歌と俳句の文芸形式の違いとそれによる世界の造られ方の違いを、楽しみながら再認識させられる。穂村弘の自由な発想は自由な口語に乗ってシリコンでもジェルでも何でも作り上げてしまうが、堀本裕樹の方は伝統的季語と文語体定型の束縛を楽しみながらそこを抜け出して新味を加えようと健闘する。

この句は「びたぴた」がお題で、出題者は詩人の谷川俊太郎さん。ようやく歩き始めたくらいの嬰兒が部屋に入ってくるやいなや、ごまめに近づき鷲掴みにする。なんで、ごまめなんかに興味を持ったのか。おやじの酒肴よろしき地味なごまめだが、子どもにとっては小さく戦いやすく、たくさんつか

めそんな直感が働いたのか。一つつかもうとしたらあれこれくつついてきてしまったのか。ともあれ、「びたぴた」から「ごまめ鷲掴み」への転換がおおらかですっかり想定外。正月らしい生命への愉快な賛歌だ。

他に、堀本さんの敢闘句を拾うと、〈新涼やひさしく触れぬ椅子の脚〉〈街師走信じられない多情の日〉〈カルピスの氷びしびし鳴る夕立〉〈冬蜂や風に水際立つ少女〉〈角落ちて四十八滝鳴りやまず〉〈つやつやのバターロールや秋の湖〉〈蒼海を描く子の袖にゐのこづち〉〈鳥交る天のふるへてゐたりけり〉など、そして最後の〈びよんぴよんと熊楠眺ねて秋の山〉が絶品。穂村さんの胸を借りてめきめき力を引き出された若い俳人がここにいた。ちなみに、お題は「びよんぴよん」、出題者が歌人の馬場あき子さんというのもなぜか愉しくうれしい。

一方、穂村さんの短歌の自由な凄さは、〈左目に震える蝶を飼っている飛び立ちそうな夜のまぶたよ〉から〈AKB48が走り出す原子炉の爆発を止めるため〉まで、実際に本を読んでものおたのしみ。私もこの正月、この五十題に挑戦してみよう。あなたもどうぞ。